



江戸の大火と森林資源

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



駿府城模型（寛永12年の天守閣焼失後の姿を再現。駿府城二ノ丸東御門に展示）
駿府も火災が多かった。駿府城も慶長12年（1607）に完成したばかりの天守閣や御殿が焼失。3年後に金属瓦を使った天守閣が完成。寛永12年（1635）、城下の火事が延焼し、駿府城は焼失。3年後に御殿、櫓、城門等が再建されたが、天守閣は再建されなかった。駿府の定火消は、天和3年（1683）の大火を教訓として発足。

江戸に初めての大火が起きたのは明暦三年（一六五七）。二日間の大火で江戸城本丸、二の丸、天守閣をはじめ、大名屋敷、旗本屋敷の大半が焼け落ち、町屋も二百町にわたって焼失し、十万人以上が亡くなりました。

幕府は、大坂、駿府などの銀座から銀三万貫を取り寄せて被災者の救済にあたり、同時に江戸の町割りを一変して火災に強い街造りを行いました。道を広くし、萱や藁葺き屋根を禁じ、火除地を設け、広大な庭園を持つ大名屋敷の配置を大変更して、延焼を食い止める町割りを造りました。定火消制度が出来、焼死した人々を弔う回向院が建設され、以降五十年ごとに大法要が営まれています。

この江戸市街地再開発の費用は、江戸城の天守閣再建を取り止めることで捻出しました。天下泰平の

世の中であるから天守閣の再建は無用と主張して、「とんでもない」と反対する老中たちを説得したのは、三代將軍・家光公の異母弟（秀忠公唯一の庶子）であった保科正之公でした。家光公の遺言により四代將軍・綱公の後見職につき、それ以降二十数年にわたり実質的に幕府の運営にあたった方です。これ以降、江戸城には天守閣は再建されませんでした。天守閣のないことが、天下に幕府の意図する世を示したことになるのです。この保科正之公が会津松平家の始祖となった方です。

玉川上水道建設も彼の発案です。京都でも大火が起こり、寛文元年（一六六一）、延宝元年（一六七三）の二度にわたって禁裏が全焼しました。禁裏と寺院の造営は莫大な費用のかかる大工事ですが、二度とも幕府の手によって即座に再建されています。

一六六六年には、ロンドンも大火に見舞われました。ロンドンは五日にわたって燃え続け、市街地がほとんど焼ける大惨事となりました。この大火のあと、それまで木造が大半であった市街は石造りの町並みに変わります。

なぜロンドンには石造りの町並みになって、江戸や京都は木造の町並みを繰り返したのか。最大の理由は、当時すでに英国は大型軍艦の建造（一隻に樹齢百年以上の大木約二千本が必要）で、森林資源が枯渇していたからです。

一方、日本には豊かな森林資源があり、幕府は正保二年（一六四五）、諸国に山林乱伐禁止を命じました。江戸では再々大火が起こりましたが、大店の商家は、数日でも再建できるような材木商に再建分の材木をキープするようになりました。

一六六六年には、ロンドンも大火に見舞われました。ロンドンには五日にわたって燃え続け、市街地がほとんど焼ける大惨事となりました。この大火のあと、それまで木造が大半であった市街は石造りの町並みに変わります。